

千刈狸の呟き

ひょんなことからバラ作りに関わるようになった。一昨年近所に転居することになり、建築中の新居を見に行った折、たまたま隣接するグラウンド側に回った時のこと。フェンスの片隅に鮮紅色の小さめのバラがびっしりと咲き誇っていたのだ。初夏の陽光のもと、あまりの鮮やかさに不意をつかれた格好でしばし呆然としたものだ。どうやら以前の住人が丹精込めて育てたものらしいが、空き家となって10年以上も放置されるも、風雪に耐えて命脈を保っていたのだ。

晩秋に新居に移ってからはそのバラのことが気になり、自分なりに枯れ枝を切ったり、つるを誘引して麻紐で結わえたりしたら翌春にはそれなりに芽吹いてくれたので、本格的にバラの世話をする次第となった。だが素人には手に負えないものらしく、初夏には株元から花芽に至るまで真っ白に粉をふいたようになり、「うどんこ病」というカビに感染したことが判明。開花しても前年の鮮やかさにはるかに及ばず、おまけに品種についても乙女の如き“アンジェラ”と勝手に思い込んでいたら、“King”という名であることも判った。誇り高きKingの御名前を間違えたのみならず、あろうことかインキンにも罹らせた訳だ。冬の剪定の際にはKing様の棘による逆襲にあう破目になったのも当然である。

blue roses—不可能なこと、ありえないことの例えとされる。自然界には青いバラは存在しない。花の色は光（太陽か月からの）と花びらにある色素の相互作用で決まるが、青い花色の色素デルフィニジンを作り出す酵素の遺伝子がバラにはないからだ。かくして長年の園芸家たちの努力は実を結ぶこともなかったが、そこで登場したのが遺伝子工学技術。サントリーは研究所を作り遺伝子組み換え技術を用いて青色色素を組み入れる等困難な試みを足掛け14年、2004年に「喝采」と名づけられて発表された、一本35ドルの値がついたこのバラはしかし、思ったほど青くはなく、せいぜい“藤色”程度だったとか。

「ミスターローズ」と謳われた鈴木省三氏が生前60年以上にわたって作出したバラは129品種（1品種に10年以上かかるのは珍しくない）、生涯をバラにかけた日本を代表する育種家である。氏の晩年には遺伝子操作による青いバラの可能性がいわれたわけだが、青いバラを作りたいと思ったことはな

～青いバラ～

孫七狸

いかとの間に氏はただ一言。

「青いバラが出来たとして、さて、それが本当に美しいと思いますか？」

伝統的な育種法についての矜持か、それとも一たしかにスカイブルーの鮮やかな青さならツユクサやリンドウのほうが相応しい。いずれ色彩的に完璧な青いバラはゲノム編集技術で可能になるだろうが、土の匂いも、吹く風も知らないその花を見て多くの人が感じるのはおそらく“違和感”ではないのか。科学の進歩によって出来ないことはない、という思い上がりに対しても。

—さて話は変わるが、孫七山の職場に向かうと、まずは海沿いの松林越しに風力発電の巨大な風車が数基以上ズラリ。鳥海山の麓の丘の上にもこの1、2年であつという間に20基近く。日常的な光景にもなり、何だかなあ、と感じてはいた。そしてつい先日のこと、診療所の背後の林の上に“それ”が突然ぬっと現れたのである。ゴジラもかくや、と思えるほどの巨大さで屹立する圧倒的な違和感。基本的に再生可能エネルギー推進に賛成の立場ではあるが、いくらなんでもこれは…眼前に現出するまで人ごとであった自らの迂闊さに絶句。

由利本荘市沖の洋上風力発電についても賛否が分かれている。「科学的データ」がないと賛成も反論も出来ないのだが、夕日の海に林立する巨大な人工物は見たくもないし、相応しくもない。さらに言えば、よそ（県外・海外）の企業が秋田の風と土（地）で商売するのも釈然としない。何か嫌な感じ—

現代では科学は権威である。非科学的との評価は全否定に等しく、「エビデンスを示せ」と声高に言い立てる者の前ではうなだれるしかない。「違和感」はデータにはならず、まして論理でもないのだ。だけどイヤなものはイヤだ、虫が好かぬ、と子供が駄々をこねるように言いたい気分である。

先日、山形県村山市にある東沢公園を訪れた。鈴木省三氏の設計により昭和31年バラ園としてオープン、広い敷地内には見頃をむかえた2万株ものバラが咲き誇り、圧倒されっぱなしであった。帰りには“Rainy Blue”という名前にひかれ、つるバラの新苗をひと鉢購入した。来年の梅雨の頃はその名にふさわしく、美しい藤色の花が楽しめそうである。